2019年10月12日 本紙 特集 012頁　(C)神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

短編小説 佳作④

タンカンの届け物

倉坂 益子 作

くらさか・ますこ 1957年生まれ。イラストレーター。小田原市

「今度、ボクシングのライト級で準々決勝に出るんだ」

前やんの言葉はいつだって唐突だ。言葉足らずで前置きがない。短いセンテンスでパンチを食らうと、三十年以上経っても言葉は色褪せない。

私が新聞社に入社して二年目の夏、前やんが庶務課に配属されてきた。原稿運びから鉛筆削りまで、編集部での雑用一切を引き受ける〝坊や〟と呼ばれるバイトだ。みんなに「ちょっと来て」「ちょっとお願い」などと気安く用事を頼まれる。

「忘れ物が東京駅で保管されちゃったから、ついでに受け取ってきてくれない？」

社員からプライベートな用事を頼まれても、いやな顔ひとつせず黙々とこなす。多くの人からもれなく感謝され、可愛がられるのに時間はかからなかった。

「鹿児島から四日前に上京しました。頑張りまっす！」

前やんの初日の挨拶は実にシンプルだった。新幹線で東京駅に着いたその日に江戸川沿いを歩き、川から部屋がよく見える木賃アパートを契約したという。当時、週刊漫画で連載中だった、江戸川を舞台にした地方出身の青年のサクセスストーリーを前やんも読んでいて、東京でのスタートは江戸川沿いからと決めていたようだ。自己紹介では結局何も分からず、私たちの方から前やんに質問して聞き出した。

職場は、都心の中心地にあるのに、なぜか名字に「やん」をつけてお互いを呼ぶ習慣があった。石やん、高やん、磯やん、平やん……。省略しにくい名字にも近藤やん、安藤やんなどと強引にやんを付ける。目上の先輩をやんで呼ぶことに初めは抵抗があったが、そうしないと伝わりにくいのでやむを得なかった。前やんは来たその日から前やんだったので、本名が前山君だったのか前島君だったのか自信がない。社内で最年少だった私は、前やんが現れて初めて仲間を得たような気持ちになった。

前やんは寡黙でよく働き、白黒映画の隅っこにいるような昭和の雰囲気があった。あまり笑わなかったが、たまに笑うと当惑したような表情になる。両頬にくっきりとあらわれる縦一本の笑い皺が、童顔の前やんに一瞬影をつくった。映画好きの先輩に「和製ディーンみたいだね」と言われても、前やんは特に嬉しくなさそうだった。

職場は副流煙と活気に溢れていた。明日の仕事は今日引きずらない。残業って何をするのさ、という勢いが一日の濃度を濃くしていた。ベビーブームに生まれた人たちが社会人となり、程よい競争心が人同士の距離を近くしていたのかもしれない。

その日の仕事を終えた社員は、暇そうな相手を見つけて囲碁や将棋を打つ。対戦相手で人気があったのは、ビル掃除の小池さんだ。年齢は七十五歳位だろうか。エレベーター前でモップがけしている小池さんをタイミングよく捕まえられた社員は得意そうだった。

「まだ仕事中なんですよぉ」と言いながら、部屋に入ってくる小池さんの顔は少しも迷惑そうではない。円筒形のゴミ箱の上に置かれた将棋盤には、すでに整列した駒が対戦相手を待っている。小池さんは盤を眺めながら、焦らすように煙草を吸う。煙の中で、人の良さそうな顔が気難しい勝負師になってゆく。

勝負がつくのは早かった。

「参りました」と頭を下げる社員に、勝ち手を説明する小池さんは少し申し訳なさそうだ。

「さてと。皆さんももうひと働きして下さいよ」小池さんが立ち上がると、止まっていた時計の針が動き出す気がした。

「ロッカーは静かに閉めてください」という張り紙が小池さんの背後でふわりと揺れた。勝負がつかなった時の将棋盤が、駒を置いたままロッカーの上にのせてある。この穏やかな時間は、本当に実在していたものだろうか。

「酒飲むと顔崩れちゃうんで、お先しまっす」

社員からお酒に誘われた時に前やんが使う、お気に入りのセリフだ。誰もこの妙な言葉を深掘りはしない。前やんは年季の入ったこげ茶の布バッグを背負い、非常階段のドアを開けて七階から勢いよく駆け下りていく。入れ替わりに一瞬、もあっとした空気が入ってきた。銀座の夜には色々な人の体温が溶けこんでいるのだろう。

前やんから、ライト級の準々決勝に出ると聞いたのは、秋を感じ始めた夏の終わりだった。なにも足さない、なにも引かない、そんなコマーシャルのセリフがあったが、規則正しい日常の中で、前やんにも私にも、何か特別なことなど何も起こらず、安定した日々がこの先も流れていくのだろうと思い始めていた。そんな矢先の、前やんからの報告は、ボディブローのように効いた。同時に、前やんのこれまでの謎が一つずつ腑に落ちていった。仕事で足腰を鍛える、就業後の誘いに乗らない、顔が崩れる、エレベーターを使わない、冬でも半袖、上腕筋が異常に太い、人付き合いに興味がなさそう、そのくせ視線を外さない。

「何それ。いつ？　どこで？」

「一週間後に後楽園」

「応援に行くよ」

「いいけど前の方に座るなよ」

唐突で前置きがなく説明不足な前やんの言葉の中に、初めて人肌を感じた。

二十代の私は、カシアス内藤や井岡弘樹など数々の名ボクサーを育てたボクシングトレーナー、エディ・タウンゼントのファンで、テレビでよくボクシングを観ていた。沢木耕太郎の『クレイになれなかった男』や、続編の『一瞬の夏』なども繰り返し読んだ。ボクシングのどこが好きかと聞かれてもうまく答えられないが、とりあえずそこには嘘がなく、見た通りであることが魅力だった。二十歳過ぎてボクシングに挑戦する無謀な前やんに、純粋さと裏返しの悲壮感を勝手に重ね合わせた。自分が会社という守られた場所で仕事をしている間に、前やんは血の滲む努力をしてやっとチャレンジャーという自分の居場所を掴もうとしている。前やんに少年少女漫画に出てくる等身大のヒーローを当てはめて、ロマンを感じた。

準々決勝は五日後に迫っていた。家の押入れの奥で潰れていたシーツの箱を引っ張り出し、長手方向に三枚のシーツを縫い合わせた。翌朝、始業前の職場の会議室に広げ、マジックで「ガンバレ！　まえやん！」と書いて横断幕にした。

「至急・応援団求む！」という回覧板を社内に恐る恐る回した。グローブをつけた前やんの似顔絵も添えたが、その回覧板は結局私の所に戻って来なかった。私用の回覧板を勝手に回したことが顰蹙を買い、どこかで没収されたのかもしれないと思うと、身が縮まりそうだった。

試合当日、集合場所には部を超え役職を超えて、三十人近い応援団が集まった。回覧板の余白に、赤い服の応援団のイラストを描いたせいだろうか。総務部の次長は真っ赤なポロシャツ姿だ。初めて会う先輩の家族もいた。皆、職場では見せない穏やかな顔付きだ。知らない同士が「前やん」でつながった。前やんの試合はもう勝っても負けてもどちらでもいい気分だった。

会場には、テレビで観るような華やかさはなかった。人もまばらで空席が多い。その中で三十人もの団体が浮いている。夢にまで見たシチュエーションが、前やんの試合に影響しないかと、今度は不安になった。

手作りの横断幕は、会場で広げると拍子抜けするほど小さく感じた。空席が多いおかげで、誰にも迷惑をかけずに思いっきり横一列に伸ばすことができた。前やんのために貸し切られた会場のようだ。

リングアナが前やんのプロフィルを間延びした声でコールしている。職場では前屈みでまったくカッコよく見えなかった前やんが、リングの上では守りの堅いボクサー体形に見える。鍛えた上腕筋は背中の筋肉とひとかたまりで美しく、普段の冴えない前やんとは別人のようだ。

相手が弱かったのか前やんが強いのか、よくわからないうちに前やんが勝って準決勝進出を決めた。即席応援団は非日常の余韻に酔って、主役抜きで遅くまで祝杯をあげた。

次の対戦は一か月後に決まった。

「前やんをどうやってなぐさめようか」

「そっとしておくのが一番傷つかないかもね」

「逆に立ち入って聞いてあげた方が楽になるんじゃない？」

にわか応援団は、前やんの最悪な状況を想定して自分たちの心を落ち着かせていた。庶務課の部長が応援団長を買って出てくれたので、まとまりはある分、初回のような勢いがなくなった。

準決勝は完敗。目標を失った前やんはこの先どうするのだろう。負けるたびに失う目標なら、何個あっても足りないか。そういえば、前やんは足腰を鍛えるためにこの仕事を選んだと言っていた。それが負け惜しみでもないとすれば、体を鍛える仕事は今後必要なくなるのだろうか。器用に方向転換して就職するタイプとも思えない。

そんな余計な危惧をよそに、週明けになると前やんは、何事もなかったように仕事に戻ってきた。目が埋もれるほど、頬が高く腫れ上がっている。誰もそのことに触れないのが余計に痛々しかった。前やんは所在なさそうにマスクをしたり、外したりしている。事情を知らない小池さんだけが、「あれ？　喧嘩してますます男前だねぇ」と呑気にいじっていた。

「鹿児島帰ると金かかるから江戸川でも走っとるわ」

前やんの言葉は時々、構ってほしいと言わんばかりに捨て鉢だ。それは、彼にとって東京で迎える二回目の仕事納めの日だった。故郷がある人はすでに帰省し、関東圏内に住む者だけが職場に取り残されたような、閑散とした中にもアットホームな年末だった。私は前やんに実家の電話番号を教えた。誘うほどは親しくはない。声をかけないほど冷たくはない。そんな感じだった。

前やんを実家に呼んでみたいと思ったのは、私の両親が前やんと同じ鹿児島県出身だったからだ。鹿児島県人はおしなべて同郷意識が強い。年配者は特に、同郷の若者に対して思い入れがあるようだ。志を持つ若者には、身内他人の分け隔てなく応援をするのだ。父親を小学生時代に亡くした私の父も、同郷の先輩にずいぶん助けられて育ったと聞いた。受けた恩は別の人に返すことでチャラ。そんな文化が脈々と流れていた。

一月二日の静かな午前中、実家の電話が本当に鳴った。

「小田原駅に来とるけど、行き方わからん」

当たり前だ。迎えに行くと、小田原駅東口の真ん中に、まるでシンメトリーのように前やんが立っていた。見慣れたこげ茶の布バッグに、モスグリーンのジャケット。煉瓦色の駅舎の背景に紛れてしまいそうだ。

「よぉ！」

「ほんとに来たんだ！」

「だってそっちが番号教えただろ」

三が日に、職場の異性の友達と実家で会うという非日常にも関わらず、前やんには旧友と再会したような懐かしさを感じた。

堀ごたつに入って、前やんは母の手料理を平らげていく。正月になると、母は鹿児島の郷土料理を作り、父と懐かしそうに故郷の話をしていた。前やんは、黙って手料理を食べている。時々思い出したように「うまいっす」と顔を上げる。その無骨さに、年配の両親は好感を持ったようだ。私が初めて聞くような鹿児島弁が、食卓を飛び交っている。

将来は故郷で小さな牧場を持つのが夢だと、前やんは父に熱く語った。体力には自信があるので、三十五歳までに乳牛を五頭くらい持ちたい。牛が好きな女性と結婚したいなどと饒舌だ。会社での寡黙な前やんとは違う、少年のような邪気のない二十五歳の青年が、年配者とこたつで向き合い、顔を真っ赤にしていた。

ボクシングの次は牧場かぁ。前やんの壮大で出足の遅い夢が、私には気が遠くなりそうなくらい、非現実的に思えた。

カレンダーの裏の大きな白い紙に、父が鹿児島の大まかな地図を描き、三人で顔を突き出している。

「父の墓はここです」

前やんが紙の上で指さしたのは、三十歳で亡くなったという父親の墓の位置だ。その北西に広がる広大な原野の一区画が、牧場の未来予想図だという。

「母親が一人で頑張ってくれています」と言って、前やんはなぜか頭を下げた。

父は「これで栄養をつけなさいよ」と前やんにお年玉を渡し、母は煮物に火を入れ直して渡した。翌月、前やんの故郷の肝属郡から段ボール箱にぎっしり詰まったタンカンが実家に届いた。不揃いだが、木バサミの跡が温かい。

前やんが二十八歳で会社を辞めた日のことを、正直、私ははっきり思い出せない。庶務課の部長が定年を迎えたのと同時に、庶務課そのものがなくなり、前やんも一緒に消えてしまった。私は、自分の人生設計のようなものに夢中で、入社当時のような純で熱い気持ちをどこかに置き忘れていたようだ。

確かなことといえば、段ボール箱のタンカンが十年間ずっと、小田原の実家に送られていたことだ。会社を辞めてなお、送り続けてくれたタンカンは、前やんとつながる唯一の線だった。タンカンが途絶えた時に何かを感じるべきだった。

前やんが四十八歳で亡くなったことを知ったのは、一昨年のことだ。夢は叶っただろうか。乳牛は飼えただろうか。牛好きの女性とは出逢えただろうか。

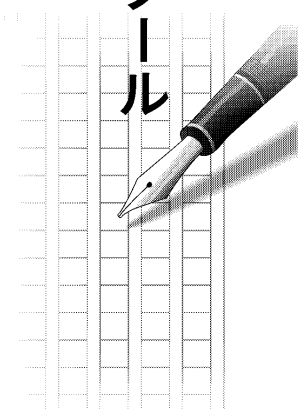
前やんの人生は、言葉足らずで前置きがなく、唐突だった。三十年以上経っても思い出は色褪せない。

講評

高度成長期の新聞社の雰囲気がよく伝わってくる。アルバイトのボクサー前やんも、モップがけの小池さんや鹿児島出身の両親といった登場人物も生き生きと描かれている。三十人が前やんの試合を応援にいく場面には感動した。

（審査員・角田　光代）

第49回 神奈川新聞 文芸コンクール



作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。佳作作品は順次掲載します。

次回は17日の予定

現代詩 佳作⑤

風にまかせて

大坪 覚 作

おおつぼ・さとる 1966年生まれ。契約社員。横浜市青葉区

偶然通り過ぎた町を故郷のように思う
ここで生まれたのかもしれないと
ここで大きくなったのかもしれないなどと

本当の故郷には帰ることはない
五月と八月と十二月
あれは移動である
白い顔をして
まっすぐに母親のところへ向かい
子どもであるという幸運で繕われた
巣の中に見えないようにもぐりこむ

お前はまたお金を数えているな
卑怯者はどんな夢を見るのだろう
いろいろな土地を追い出され
異郷で眠りを貪る彼を
だれかが祝福するのだろうか

故郷と入力するたびに
指は必ず間違える

まったく違う文字が現れると
無性に塩をなめたくなるのだ

帰ることができないなら
息を止めて
空っぽのからだを運ぼう
そこで乾ききってしまったら
風があとは引き受けてくれる
とても冷たくて厳しい風

講評

誰しも初めて訪れた場所なのに、一度来たことがあるような気になることがあるだろう。作者はその感覚を大切にして、自分の故郷を回想している。自虐的に自分を扱うことによって、逆に故郷への想いが強く出ている。

（審査員・金井　雄二）

井上　あきむ　画